

◇皆川完一先生(D.W.V.元顧問 1955 年～1962 年) 平成 23 年没 享年 83 歳

ご冥福をお祈りします

飯嶋義信



皆川完一先生は平成 23 年 10 月旅先にて急逝されました。享年 83 歳でした。心よりご冥福をお祈りいたします。先生は、昭和 28～32 年の 5 年間獨協学園で日本史講師として在職され、退職後は東京大学史料編纂所教授、愛知学院大学教授、中央大学教授を歴任されました。正倉院文書研究の泰斗だったそうです。

先生は獨協在職中、ワンダーフォーゲル部(昭和 30 年創部)の顧問として北村良三先生とともに学生指導に当たられました。

ワンダーフォーゲル部創部の前年(昭和 29 年)12 月末に、当時本高校 2 年の金子隆司 君と戸山高校生(伊豆野英二君、島田敏彦君、今井康彦君)の計 4 名 が北アルプス・西穂高岳で遭難する事故があり、北村、皆川、金子助手(歴代顧問)の 3 先生が現地で遭難対策作業にあたられました。皆川先生のご冥福をお祈りします。

D.W.V.元顧問 飯嶋義信

◇高梨富士三郎先生(D.W.V.元顧問 1960 年～1988 年) 平成 9 年没 享年 71 歳

「教育への情熱、生徒への愛情」高梨先生を悼む

飯嶋義信



・生徒とともに自らの青春を謳歌

容体が思わしくないと伺って、あわてて病院に駆けつけた時には先生の意識はすでになかった。連日の猛暑がふと和らいだ 8 月 14 日のことで、その日の夕方遅く、先生は永眠された。日ごろの忙しさにかまけてご無沙汰していたことが、今さらのように悔やまれてならない。

高梨先生に初めて出会ったのは、いまから四十数年前、中学 3 年の時であった。空襲の焼け跡があちこちにとり残されていた頃で、日本中が貧しく騒然としていた時代だった。そんな時、旧制中学の気分を引きずったままの教師が残っているようなところに現れた先生は、気風がよく漱石の坊ちゃんを思わせるようなところがあった。巧みな比喻を用い、ざっくばらんな口調で古い時代を

切り分ける先生の授業は、アテネの民主制から説きおこし、民主主義の意義を全面に打ち出した社会科の教科書とともに忘れがたいものである。高校になって入部した文芸部では、同人誌『吠える』によく執筆していただいた。時に物議を引き起こしかねないものもあったように聞いているが、身近なことからさまざまな問題提起をしてみせてくれる先生の文章は読み応えがあった。また、獨協祭の時には演劇の指導をはじめとして、舞台や幕の準備、公演全体の構成進行にも先生は労を惜しもうとはしなかった。まるで生徒とともに自らの青春を楽しんでいるかのようにであった。

・二度と若者を戦場に送り出さない

数年後、母校で同じ社会科を教えることになって、先生とは新たな関わりをもつようになった。相変わらず旗幟鮮明で、はっきりと物を言うことは、その面倒見のよさとともに変わりとはなかった。が、先生は以前よりせつかさが増したように見受けられた。多分、生活指導の責任者という重責を背負うことになっていた先生は、同僚教師や生徒に自らの意が通じないことに焦りを覚えるようになっていたのだろう。

その後、先生は学年主任、高等学校の主任、そして教頭へとすすまれた。このことは、先生にとって本当のところ不本意なことだったのかもしれない。しかし、教室での授業や校務の遂行だけでなく、背伸びしがちな高校生相手の読書会、都会育ちの生徒を連れての農村調査、教頭の激務により断念するまで続けたワンダーフォーゲル部の顧問としての数々の山行、さらには、100周年記念体育館に始まり、今ようやく軌道に乗った校舎改築の推進。こういった先生の教師としての誠実な実践が、教育に対する情熱、生徒への愛情、働く仲間との連帯感、職場での強い責任感などと相まって、ごく自然に先生を教頭へと押し上げることになったのだと思う。

そんな先生の教師としての原点はどこにあったのだろうか。おそらくそれは、あの戦争の問題であったと思う。戦争を憎み、二度と若者を戦場に送り出さない。それが自分も兵隊にとられ、また肉親や友人を戦争で失った先生の願いであった。

しかし、そのことを先生は声高に叫んだりとはしなかった。真面目に真剣に授業に臨み、生徒の本分をつくすことを求め、また同じ趣味や目的をもつ仲間が信頼と協力の上に、何かを成し遂げようと努力することを歓迎した。

そういった確かな営為を続けることが、民主的な人間を育て、かつての日本人が犯した過ちを繰り返さないことにつながると、先生は確信していたに違いない。

ここ半世紀の間、日本の夏は戦争と平和の夏となっている。その日本の夏の盛りに亡くなられたことで、我々残されたものたちは夏が来るたびに高梨先生が伝えようとしたことを、深く考えないわけにはいかなかったのである。

D.W.V.元顧問 飯嶋義信



故高梨先生の自然葬 生前のご希望 相模灘で散骨

金 有一



高梨先生が亡くなられてはや三余年の歳月が流れようとしています。生前から遺骨を自然に還すことは、先生の強い願いでした。

秋も深まった11月12日、好天に恵まれた相模灘でご家族、ご親戚、ご友人、新宮譲治先生らご同僚、佐藤八郎ワンダーフォーゲル部OB会長らOB諸氏、教え子らで散骨を行いました。

英国のチャーチル首相がオーナーであったという海の貴婦人と呼ばれる帆船”シナーラ”で三浦半島の油壺にあるシーボニアマリナを出航。江ノ島の南20kmの海上で鐘の響きに導かれ、奥様がご遺骨を海中に投

じられました。参列者全員で投じた赤や黄の色とりどりの散花は水面を漂い、陽の光を受け、たともなく美しく輝き、感動的でした。波のうねりの中に描かれた円形の航跡の中心に拡がる散花に先生のお姿を偲び、涙し永遠のお別れをさせていただきました。3時間ほどの航海でしたが貴重な体験をさせていただきましたこと、御家族の皆様にご感謝申し上げます。

D.W.V元顧問 金 有一

◇杉島佑一君(昭和35年卒) 平成14年没 享年60歳

杉島君との想い

佐藤八郎



彼との出会いは、高校1年の時同じクラスになり席が近く小生を囲み、杉島君、そして金君と話が合い、山の話になりました。

小生がワングルに入部しようと誘ったところ杉島君が入部したいと言うので、二人早速入部。それから40年以上の付き合いが始まりました。

高校時代は毎週のように奥多摩、丹沢山系の山へ行きました。彼の実家は名栗でしたので、御実家に泊まって武甲山へ山登りしたものです。大学生になってからは、山ではなくスキー、スキーでした。

そんな彼は、高校1年から登山靴は革製、小生はキャラバンシューズでした。スキーをする時は、当時最高級のホテルスター、衣装はトニーザイラーが映画で着ていた様な格好で滑っていました。私としては、学

生として不思議に思いました。

其の後、社会人になり彼は建築会社へ、小生はベアリング会社へと、それぞれの道へ進みました。

今振り返りますと、短い命に只々驚き、今は冥福を祈るばかりです。

昭和 35 年卒 佐藤八郎

◇彦坂震三君(昭和43年卒) 平成18年没 享年56歳

彦坂震三氏の思い出

中野 茂



彦坂震三氏は昭和43年3月の卒業生で、同年4月に中学に入学した私とは目白の校舎では入れ違いの関係になります。因みにワングルの部室があったという木造図書館はこの年に建て替えが始まり、部室棟として作られたコンクリート長屋へ移ったのはこの年だったのだと思います。

彦坂氏との交流が何時頃からだったのかハッキリとした時期は思い出せないのですが、平成5年には間違いなく同乗していたり自宅にお邪魔したりしていましたので、彦坂氏が亡くなられる平成18年11月までのおおよそ15年の付き合いであったと記憶しています。

荒川区尾久で幼少期を過ごして、一時期、母上が勤めていた小学校の校舎に住んでいたことがあるという話を聞いたことがありました。私が知り合ったころは越谷市で食料品製造業を営んでおられました。それ以前には自動車部品製造をしていた時期があったとも聞いた覚えがあります。獨協大学時代は校舎よりも雀荘に多く通い、雀士を自認する父上から盲牌の甘さを指摘された事に奮起して、盤面を滑らせるだけで牌の区別がつくまでに上達したという話を聞いた事があります。しかし、OB 会には私はもとより打ち手がいませんのでお手並みを見ることはありませんでした。

私の家族はみな杏が好物だと言うと店頭では5粒6粒の単位で売る代物を大量に頂き、その後に加工現場を拝見したところ従業員が1粒ずつ手作業で整えている姿をみて、大いに恐縮したものです。

彦坂氏とは車に同乗して出かけることが多く、小諸日新寮の親睦会、水晶山の四万温泉、筑波山、岩櫃山のときは先乗りして本隊と合流する前に浅間隠山を歩きました。この原稿を書きながらポロポロと話が思い出されるのは、移動中の時間を多く過ごした故だと思います。

先にも書きましたが、彦坂氏は平成18年に亡くなりました。私はお見舞いには行っていません。楽しく付き合った人の末期を見るのは辛いというのが理由です。あと病室の彦坂氏から還暦記念の“赤シャツ”が着たいとの願いがあり、私なりに奔走したつもりでしたが、ご家族のもとにお届けできたのは亡くなられた後でした。申し訳ないと思っています。

昭和49年卒 中野 茂

◇植田一郎(昭和34年卒) 平成23年没 享年70歳

先輩を偲んで 南アルプス 鋸岳ビバーク

常盤雪夫



手元に数枚のスナップ写真がある。その1枚には寒さからかズボンのポケットに手を入れ、寝ぼけ顔で焚き火跡を見ている私がいる。その後ろには大きな岩小屋があり、数多くの岳人が利用したであろうその天井は煤けて黒くなっている。

すっかり記憶が薄らいでしまった南アルプス鋸岳紀行はこのスナップ写真から始まる。メンバーは顧問の奥貫靖弘先生、3年の渡辺知也先輩、同じく3年の植田一郎先輩、そして2年の常盤の4人である。山行は昭和33年(1958年-)の5月連休の時のことである。

岩小屋を出発後、河原沿いの登山道はしばらくして鬱蒼たる樹林帯の中を進むようになる。やがて、1回目の渡渉地点に出る。先ず私が空身でザイルを着け対岸に渡る。その場で用心のため確保体制を執り、他の3人が1人ずつ次々と渡る。踝ぐらいの深さだがよろけると膝以上の深さまでつかってしまう。雪解け水は流れが速く清らかだが冷たい。最後に私が涉り直し渡渉を終える。渡る距離は10mほどだが結構時間を使った。このような渡渉を3回繰り返しやっと樹林帯を抜けた。

そこは稜線まで続くであろうと思われる長くて急峻なガレ場の下端である。明るい。足元の岩は、鉄平石のように表面は平らだが、積み重なっているために不安定であり非常に歩きづらい。特に鉋靴の者にとっては滑ることも心配しなければならず気を使う。小休止の度に上を見上げればガレ場は際限なく続き天空に突き抜けている。

急登と歩きにくさからこのガレ場を抜けるのには結構な時間を要した。



岩小屋にて

この紀行文を書くにあたり、あまりにも私の記憶が少ないのでインターネットで検索しコースや地名